



転機

シサムック ポンチャイ
SISAMUK PHONCHAI

私の故郷はバンコクから北東へ700 km 離れた所にあります。父母は、私が生まれる前に離婚。その後、母は新しい人と結婚し、その3ヶ月後に私は生まれました。祖母によると、私が生まれた時、親戚は「この子は父親がいなから殺すべきだ」と言ったそうですが、それに祖父母は反対し、母と共に私を育ててくれました。もし祖父母の反対がなければ、今の私は存在していませんでした。

15歳になり、親戚の勧めでバンコクのベニヤ板工場で働くことになりました。まだ中学生でしたが、家は貧しく一日でも早く家族をささえたいと思ったからです。

その後、タクシー会社の修理工、車の運転手と仕事を転々とし、気が付くと20歳になっていました。バンコクに住み始めて間もなく祖父母が相次いで亡くなり、母がガンで亡くなったのも20歳の時でした。

このように将来への夢や希望を持たずにバンコクで生活していたある日、知り合いの紹介で、日本企業の運転手として働くチャンスを得ることが出来ました。日本人の運転手を続けているうちに日本をもっと知りたいと思うようになりました。すすんで日本語の勉強をするようになり、その日本人と奥さんも私に日本語を熱心に教えてくれました。今振り返れば、その頃が私の人生の転機だったと思っています。

その日本人は、タイで工場を作る仕事をしていて、工事現場にもよく行きました。そこでは

多くの人が溶接や配管加工といった仕事をしていましたが、彼らを通して、自分の技術を持つことへのあこがれを抱くようにもなりました。そんなある日、その工事に参加していた菊池タイの社長さんが「日本で溶接の勉強をしてみないか？」と私に問いかけてくれました。私は、日本に行きたいという思いが強くなっていたので、すぐに「はい」と答えました。それからは、菊池タイでの溶接と日本語の勉強を懸命にやり、今、ジツコや菊池工業のおかげで日本で実習を行うことが出来るようになったのです。

振り返ってみると、10代までの私は、夢も目標も無く、ただ生活のために働いていたのですが、20代になってからは、色々な人と出会い、その度に多くのことを学び、将来の目標を持てるようになりました。研修、実習期間はすでに2年が過ぎようとしています。今では、仕事の他に新しく加わる研修生への教育や、他のタイ人に日本語を指導したりできるようになりました。

私の実習期間は残すところ1年になりましたが、もっと技術を高めるよう実習に取り組んでいきたいと思っています。実習期間が終われば、次は、日本で学んだ溶接技術や仕事の方法をタイ人に伝えていきたいと思っています。また、せっかく学んだ日本語を更に上達させ、溶接を通して日本とタイの架け橋になることをこれからの目標にしたいと思います。